



## 臺灣民俗の研究と

### 池田敏雄氏の「臺灣の家庭生活」

#### 山 中 彰 二

臺灣子島人の生活習俗に関する適切な参考について書かれたことが度々ある。その方面的著書も少くはないが、いざおすゝめすることになると何れを擧げてよいか迷はざるを得ない。慣習調査會の手に成る諸種は學術的に貴重であるのみでなく、洲や海南島においても非常にお役に立つてゐると聞いてゐるが、之は専門的であり且つ大部なもので、一般向の参考には一寸なりかねる。その他に例へば片岡義氏の「臺灣風俗誌」の如きは、長年の経験に基いて、各方面の事實を細緻に採録したもので、立派なものではあるが、併し現在の讀者に何とはなしに物足りないことも又幾ひ得ないところである。

民俗方面に関する研究著作は、先づ第一

に質疑的要件から、次に好奇心的心理からなる事が先づ採録される。更に好奇心をそよる事柄が記述される。重要な事項、興味を引かない事項は闇知され、看過される。従つて断片的な生活の模様が何はれても有機的な生活の姿は浮び上つて来るものではない。

我國において民俗學的關心が高まつて來たのは比較的近年のことである。從來とかく特異的なもの、驚奇的なものに氣を奪はれがちであるが、庶民生活の主義は究るその平凡な日常生活に在ることが漸次開拓されて來た。統治上にはさして重要でなくとも固有の生活によつて深い意義を有する事柄がある。それ程面白くはないが看過せんならない事柄もある。更にこれらの事柄

も當然ならんでゐるわけでなく、有機的な組織をなしてゐるのである。勝手にその二を摘出するのではなく、日常平常の生活のありのまゝの姿。その仕組と營みとを闡明すること。これを民俗學的方法であり基本的な民族生活を把握する所以である。而して統治上に必要な調査事項といふものも、始めはさしあたりの應急的な対策に必要な若干の事項のみで十分であつたが、統治の組織が整備し、社會生活はある方面に導いて行かうとする場合には、もはや断片的な事実ではまにあらず、その社會の全般的な模様、生活の総合的な姿が問題となるのである。現代の臺灣はある意味においてこの段階に入つてみると謂ふことが出來やう。昨今皇民奉公運動の展開、皇民綱成の徹底化、或は徵兵制の實施に關聯して、根本策動の爲に本島の社會構成、その機能特徴如何を闡明することが各方面において要請されてゐる。これに應へる爲には從來の所謂調査ではもはやまにあはず、民俗學的或ひは社會學的研究が必要なのである。從來臺灣の生活習俗を扱つたものには、殘念ながらこの方向に取ふものは甚だ少い様に思ふ。この點においてこの度の池田氏の

著書は意義あるものと謂ふべきであらう。

## 二

ペリーの東北部に在るオマーケー部族の民衆についてメトロウ及テスマンの二人がそれぞれ独立に観察をした。メトロウは四十六の調査項目を擧げたのに對して、テスマンは九十六項目を擧げてゐる。ところが兩者に共通な項目は僅かに四つしかなかつたのである。同じくオマーケー部族の生活を對象としてゐながら、その描いた民族生活の姿は全然異つたものである。この様な事實から見て、民族研究といふものが如何に頗りないものであるかと察せられる。甲と乙とが違つた時に異つた現象を觀察したとしたらその取扱項目が自然異つて来る。だが甲乙共に同じ時に同じ事柄を觀察したとしても、彼等の記録叙述は異なるものである。そもそも之は如何なることに由るものであらうか。

物事を見るといつても、單に物事が目的に起ることだけで成立つものでなく、必ず認識主體の活動がなければならない。目の前に起ることを此方で見て、始めて認識が成立つ。心不在焉、視而不見、聽而不聞、食而不知其味と昔の人も讀つてゐるではな

いか。ところで、見る人の心的內容は所屬社會階層の如何によつて、又同一人につても年齢環境如何によつて異つてゐる。さればこそ同じ語言でもどういふ人が之を讀むか、又何歳の時に之を讀むかによつて、その受取る内容が異つて來るのである。

一つの祭禮を觀察記錄する際に、我等はトーキーの様に出来事を細大もらさずありのまゝに寫すものではない。また事實そぞろすることも出来ない。肺の最中に甲が虫を同じ時刻にこの胸に虫がとまつたとしても、この様な瑠璃なことは看過される。皆が飛んだりはねたりしたとしても取り立てゝ問題にされることはないが、若しそれがカシガルーがねでゐるのをまれるものであるなら狩獵生活に關係ある儀禮として取上げられる。この様に觀察記錄をするものは一種の選擇を行ふのである。

既に選擇を行ふからには一つの標準が前提されてゐる。多くの場合意識されてゐるが、暗黙の内に一つの標準が置かれてゐる。而してこの標準は觀察する人の心的內容如何によつて異つて来る。野蠻人は神の靈音を打き込まうとする信俗、製品を賣付けるようとする貿易業者、大人しく官ふこと

を開く様にと念する行政官が同じ時に同じ現象を觀察したとしても、彼等の關心を引く事柄、彼等が重要として選擇出来る事柄は必然的に異らざるを得ない。従つて同じ現象に對する彼等の認識の像も個々別々である。更に彼等の代りに學者をもつて來ても、政治學者、法律學者、經濟學者、社會學者等によつて、各々異つた像を描くのである。

成心を去つて、虛心坦懐にありの儘に物事を觀察することは、誰しも念する處である。又觀察する人は、自分は冷靜公正に觀察してゐると確しも信じがちである。だが本當の處各々自分の眼で、自分のメモで物を見てゐる。事實又眼が、メモがなければ物を見ることが出來ない。之を理論的に表現すると、人間は各々ある範囲、ある價値標準、ある假設的原理を以て事物を認識してゐるのである。信俗は宗教の範囲を以て對象に臨み、宗教的な事實に注意を引かれ、此を重要なものとして取出してその認識の像を構成する。貿易業者、行政官、經濟學者、社會學者も各々自己の範囲を以て臨み、それ／＼異なる像を構成する。同じ宗教の範囲を以て對象に臨むものでも、

あはれな小羊を是が非でもイエスの福音に浴せしめなければ恵まない自信、迷信を打破し福利を増進せしめようとする壁壘家、或ひは宗教現象を理論的に検討しようとする宗教學者に於ける如く、價值規準の異なる宗教現象を理窟的・論理的に検討する宗教學者であつても、アーチャー・ミズム、フレアニミズム、ナチュリズム、トーチミズム等その假説的原理が異なるにしたがつて、その摘要する事項と構成する對象の様とが又異つて来る。これらの事實から考へるならば、同じオマガア部族の生活について、二百三十八項にわたる觀察事項の内共通事項が僅か四つしかなかつたものであつて、暗くに足りない事である。

## III

人間は恩恵する動物である。その目にふれる日月星辰、山川草木から人間世界の吉凶禍福に至るまでを聯絡あるもの、因果的關係あるものと見なければ氣がすまない。如何なる未開人と雖も必ずこれらの事象を説明する神話傳説を有つてゐる。彼等を離れてする森羅萬象がこの様に意味を有たせられて始めて彼等は安心立命することが

出来るのである。之が即ち假説的原理であつて、如何なる未開人にあつても如何なる素朴的な知識に在つても、本人には意識されてゐないが暗黙の内に前提されてゐる。たゞそれが因果律を無視した所謂前論理にしたがつてその目的に反対する對象の姿が異つて来る。更に等しく宗教現象を理論的に検討する宗教學者であつても、アーチャー・ミズム、フレアニミズム、ナチュリズム、トーチミズム等その假説的原理が異なるにしたがつて、その摘要する事項と構成する對象の様とが又異つて来る。これらの事實から考へるならば、同じオマガア部族の生活について、二百三十八項にわたる觀察事項の内共通事項が僅か四つしかなかつたものであつて、暗くに足りない事である。

出来るのである。之が即ち假説的原理であつて、如何なる未開人にあつても如何なる素朴的な知識に在つても、本人には意識されてゐないが暗黙の内に前提されてゐる。たゞそれが因果律を無視した所謂前論理にしたがつてその目的に反対する對象の姿が異つて来る。更に等しく宗教現象を理論的に検討する宗教學者であつても、アーチャー・ミズム、フレアニミズム、ナチュリズム、トーチミズム等その假説的原理が異なるにしたがつて、その摘要する事項と構成する對象の様とが又異つて来る。これらの事實から考へるならば、同じオマガア部族の生活について、二百三十八項にわたる觀察事項の内共通事項が僅か四つしかなかつたものであつて、暗くに足りない事である。

出来るのである。之が即ち假説的原理であつて、如何なる未開人にあつても如何なる素朴的な知識に在つても、本人には意識されてゐないが暗黙の内に前提されてゐる。たゞそれが因果律を無視した所謂前論理にしたがつてその目的に反対する對象の姿が異つて来る。更に等しく宗教現象を理論的に検討する宗教學者であつても、アーチャー・ミズム、フレアニミズム、ナチュリズム、トーチミズム等その假説的原理が異なるにしたがつて、その摘要する事項と構成する對象の様とが又異つて来る。これらの事實から考へるならば、同じオマガア部族の生活について、二百三十八項にわたる觀察事項の内共通事項が僅か四つしかなかつたものであつて、暗くに足りない事である。

人智が進歩するにつれて自然現象社會現象の因果關係相互關係に付いて漸次思索をめぐらし、神話的な説明から形而上學的な説明に進み、やがて實證的科學的な説明を試みる様になつた。而して民俗の認識においてこの假説的原理が素朴的な素人の思付に過ぎないものであるか、それとも理論的に検討されたものであるか、決定的な問題である。對象に臨む範疇、價值規準、假説的原理が素朴な素人の思付にすぎないものなら、たゞその社會に長年生活し事情に精通してゐても、我等はせいべつあれやこれやについての博識に感服させられるのみで、民族生活については教へられる處がなかなか開拓あるものと見なければ氣がすまない。あるとしてもそれはゆがめられた姿にすぎない。理論的に検討された範疇、價值規準、假説的原理を前提して、即ち見る眼、味のある問題でなからう。だが、地道に民俗の道を歩んだ人は別に方針論的検討などを有つて始めて種々の現象が有機的に連絡

し、描かれた生活が生きて來るのである。  
範疇と價值規準によつて觀察者は難多な現象から重要な事柄を選擇抽出し、假説的原理によつて之を整序する。かくして整序されたものによつて遂に假説的原理を檢討する。もしそれが妥當するものでなければ理には相違ない。

人智が進歩するにつれて自然現象社會現象の因果關係相互關係に付いて漸次思索をめぐらし、神話的な説明から形而上學的な説明に進み、やがて實證的科學的な説明を試みる様になつた。而して民俗の認識においてこの假説的原理が素朴的な素人の思付に過ぎないものであるか、それとも理論的に検討されたものであるか、決定的な問題である。對象に臨む範疇、價值規準、假説的原理が素朴な素人の思付にすぎないものなら、たゞその社會に長年生活し事情に精通してゐても、我等はせいべつあれやこれやについての博識に感服させられるのみで、民族生活については教へられる處がなかなか開拓あるものと見なければ氣がすまない。あるとしてもそれはゆがめられた姿にすぎない。理論的に検討された範疇、價值規準、假説的原理を前提して、即ち見る眼、味のある問題でなからう。だが、地道に民俗の道を歩んだ人は別に方針論的検討などを有つて始めて種々の現象が有機的に連絡

苦勞とが自ら導いてくれる。したがつて出来上つたものは思付による素人體でなく、單なる資料集でなく、まさしく民俗學的な観察なのである。ひるがべつて從來の文獻を見るに、滿々たる自負を披瀝しながらその實たはしない素人の思付をよりはしてゐるにすぎないものが少くない。民俗の闇明どころでなく、殊更に民俗の誤解に資するもののが少くない。これらに比べるならば池田氏の勞作は、ほんのさゝやかなものではあるが併し斷然ひかつてゐるのである。

## 四

虚心坦懐に公平無私に事物を觀察するといふことが如何にあてにならないものであるかは、我等の見た處である。見る人が坊主であるか商賣人であるか役人であるかによつてその「見た」ものが異つて来る。更に同じ種類の人間であつても見る態度如何によつて認識の像が異つて来る。對象をうさがらしの見世物として見る場合、自分の利益に關係するものとして扱ふ場合、或は自分の使命を遺命に關するものとしてぶつかる場合とによつて、同じ事象について

關心を引く事項が異り、同じ事項に對してもその付する重要性が異り、出來上つた認識の像も從つて異らざるを得ない。本人が意識の像も從つて異らざるを得ない。本人が意識してゐようともまいとを問はず、こき下してやらうとする人はけちの付けられる事實ばかりひろつて羅列し、そこ品質するものは、悪い點には目を覆ふてよささうなものをばかり擧げる。ひとり、育み導いて行かうとする建設的精神性に燃る人のみが、冷静に是を是と非を非とすることが出来る。理論は實踐に制約されると謂ふが、民俗の世界においては理論は實踐によつて決定されると謂ふべきであらう。

ひるがべつて我が蒸氣について見るに、この點にも重要な問題が存してゐる。同じく蒸氣の民俗を扱ふにしても、單に統治者の便益及び遊覧者の興味から書かれたものであるか、或は帝國的生命的な一環としての蒸氣を建設し推進して行く理念を胸に懷いて書いたものであるかによつて、結果に實に雲泥の差が生ずるのである。第何頁の第何行についてこの事實を指摘するのは、固より容易なことではない。併し一讀卷を要ふた後に、筆端にあふれる真跡がひし

利巧さ、器用さ或は愚劣さに感服させられるものもあつて、紙上に躍る作者の心は捉ふべくもない。

民俗學の仕事を通じて、又個人的な接觸によつて筆者の知る池田氏は、理想蒸氣建設の熱情兒の一人である。眞摯な態度を以て民俗の道に精進して來たことは、なごやかな雰圍氣が紙上にたゞよふことによつても伺はれる。この點においても從來の文獻の多くと選を異にしてみると謂ふことが出來やう。

## 五

一般的原理を把握し以て複雑な事象を處理して行くことは、近代の西洋式の科學教育が腐した偉大な效果である。ところがこの傾向は、行き過ぎるとかへつて少からざる弊害を齎す。

内地から蒸氣に來られる、先輩や諭者内に蒸氣に來られる、先輩や諭者が之に蒸氣の民俗或は民族性に關する根本原理を授ける。先づ第一に本島人は利己主義的であること、第二に物質的で金錢を愛すること、第三に團結心愛國心がないこと等々と。この原理さへのみこめば蒸氣の事象はたちどころに説明理解が出来る。事中

理に基くものでありあれは第三の原理に由るものであるといふ風に快刀亂麻をさぐ勢で解決して行くことが出来る。一般的原理の把握によつて總ての事柄を簡単に處理して行くといふ近代教育の意旨に由つて、臺灣民俗の奥義の免許皆傳はものの三分間もあれば十分なのである。この様な造詣な士に比べたら、幾多の不自由をのんで數年間本島人の家庭に生活し、つづくノートをとつた池田氏は、實に頭の悪い人と謂はなければならぬ。

所謂一般的原理の意義は決して小さいものではないが、それさへふりまはせば如何なる複雑な事象もたちどころに解決出来る様な打出の小袖では決してない。新しい事象に當面すれば所謂一般的原理を手引として刻苦探索して始めてその真相をきほめ、有効適切な處理をなすことが出来るのである。

池田氏がいか程猛烈に打込んだかは、この度の著書の巻頭を飾る金閣教授の序文によつてもその一端を伺ふことが出来る。その努力の結晶に比べたら、一般的原理の遊戲はよきがたポンチ繪にすぎない。池田氏の眞摯な努力が當局にも十分買はれ、資材

缺乏の折柄にもかゝらず發行部數を殊に多く内地への普及にも勞をとられると聞いてゐるが、實に臺灣民俗の研究にとつて近來にない快心事である。

## 六

池田氏が民俗研究にたづさはられてから既に相當日がながい。一人が一つを引受けてもかなり荷の重い「民俗叢書」と新建設の編輯を一人で引受けながら更に今度の様な勞作をする勤勉と精力とは全く敬服させられ、筆者の如きものには無言のきびしい願である。更に時間と餘裕とかあれば一層充實完備したものを世におくることが出來たのは疑ひのない處で、池田氏も勿論現状に満足してゐるわけでないと思ふ。

全體の構想は研究の途上にあるものとして、始めから完備したもの求めるのは無理であらう。細節については更に吟味を加へたらと思はれる處もある。だがいざにしても本書は、

一、單に實際的な必要に應へる爲の断片的な調査や好事家の筆のすびではなく少しの努力の結晶に比べたら、一般的原理の遊戲はよきがたポンチ繪にすぎない。池田氏の眞摯な努力が當局にも十分買はれ、資材

二、素人の思付によるものでなく、著者が相當民俗學に年期を入れ、科學的に取扱つてゐること。  
三、頗る建設的な態度を以て臨んでゐること。

四、一般的原理をふりまはして事實を簡單にかたづけてゐるものでなくして克苦勉勵の結果出来上つたものであること。

五、臺灣民俗の研究の新しい段階へ一步ふみこむものと見ることが出来るであらう。

尚ほひでながら、本書は主として風俗慣習を扱つたもので、即ち臺灣の家庭生活に関する民俗學であるが、家庭内における親子關係、夫婦關係、姉妹の關係、兄弟姊妹の關係等に関する問題、即ち臺灣の家族生活に関する社會學は、自らその課題外に屬するものである。臺灣の社會生活に關心を有つ人は兩方面の事を共に知りたいと思ふが、後の問題については筆者が臺灣文化論叢第二輯に出す「俚語に現れた臺灣及支那の家族生活」(自下校正中)において取扱つてゐる。御参考なされば御参考になる處があらうと思ふ。